全国盲ろう教育研究会
会報　第18号

2020年３月発行
全国盲ろう教育研究会事務局

まもなく春の訪れ･･･という時期に、新型コロナウイルスによる感染拡大が心配され、皆様も不安な日々を過ごされていることと思います。一日も早く平穏な日が戻ることを願うばかりです。

当研究会に集ってくださる皆様お一人お一人に、少しでも有益な情報を提供していきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

●全国盲ろう教育研究会第 17 回研究協議会・定期総会報告

2019 年８月３日（土）・４日（日）、全国盲ろう教育研究会第 17 回研究協議会を国立特別支援教育総合研究所にて開催しました。久里浜の海を眺めながらの研究協議会に特別支援学校の先生方を中心に、施設指導員、保護者、医師、教育センター職員など、全国から 80 名ほどの方が参加くださいました。盲ろうの子どもたち、ボランティアさんを含めると110名程の方々にお集まりいただきました。

今回の研究協議会実施にあたりましては、前回に引き続き、国立特別支援教育総合研究所と筑波大学附属久里浜特別支援学校のご支援、ご協力をいただき、快適な環境の中で研究協議会が実施でき、盲ろう児者のプログラムも進められましたことに感謝いたします。また、盲ろう児者の活動プログラムの実施にあたりましては、多くのボランティアの方々にご協力いただきましたこと、心よりお礼申し上げます。

以下のようなプログラムで実施しました。

【１日目　８月３日（土）】

〇開会式

〇海外情報報告

「英国における盲ろう教育実践に関する報告」

広島大学大学院教育学研究科　学習開発専攻特別支援教育学分野

河原　麻子　氏

〇ポスターセッション

【２日目　８月４日（日）】

〇実践報告

「先天性盲ろう児者の生涯の学びを支援する地域活動」

徳島県立徳島聴覚支援学校教諭　　長尾　公美子　氏

〇分科会（以下の５グループに分かれ、実施しました）

① 盲ろう幼児児童生徒を初めて担当したあなたへ

② 就学前の生活・支援

③ 卒業後の生活を豊かに

④ コミュニケーションについて

⑤ 補聴器・人工内耳について

〇分科会の報告

〇閉会式

２日間の様子を紙面にて報告いたします。

尚、事務局の責任において概要をまとめさせていただきましたこと、ご了承ください。

●全国盲ろう教育研究会　第 17 回研究協議会報告

海外情報報告　　**【８月３日】13：45～15：45**

「英国における盲ろう教育実践に関する報告」

広島大学大学院教育学研究科　学習開発専攻特別支援教育学分野
河原　麻子　氏

はじめに

私は、盲ろう青年期に焦点をあてて研究を行ってきました。その中で、盲ろうの青年期の支援を行っているセンスというイギリスに本部のある支援団体に興味を持ちました。そのセンスと連携をとっているのが、イギリスのバーミンガム大学でしたので、バーミンガム大学の修士課程で学んできました。

今回は、イギリスの特別支援学校、通常の学校、そして施設における盲ろう教育の実践についてお話します。（映像を交えながら報告いただきました。）

１．Ｂ特別支援学校重複感覚障害部門での盲ろう児の指導

バーミンガムにあるＢ特別支援学校には、重複感覚障害の児童生徒を対象とした部門があり、20 名程度の盲ろう児が通っていました。この部門の重要な特徴は、重複感覚障害に特化した独自のカリキュラムを活用し、段階に応じた指導を行なっていることです。

このカリキュラムは、もともとある尺度を感覚障害の子どもに合うように作りかえたものです。社会的な関係や感情の発達、コミュニケーション、概念の発達、感覚反応、時間と場所の理解、歩行や動き、学習のオーナーシップ、ルーティーンや変化への反応という８つの領域を段階１から段階４に分け、それぞれの項目について、「達成している」「ある具体的な場面では達成している」「気づき」のどの様子が見られたか、日にちと具体的なコメントを書きます。個々の子どもの成長の段階が分かるようになっていますし、授業づくりに役立つこと、他の教員や保護者と連携がとりやすいといったメリットがあります。

Ｂ特別支援学校においては、盲ろうの児童生徒が過ごすために様々な環境的な配慮がありました。例えば、一人一人の子どもの好みに応じた個人スペースがあって、そこには、子どもが好きな物（手袋やぬいぐるみなど）やク

ッション、ベッドシートが置いてありました。休憩時間には個人スペースで教員にマッサージをしてもらっていました。例えば、段階１の子どもであったら、「概念の発達」の項目にある身体の部分の探索について、マッサージをする時に、〇〇君の足、といった声掛けをしていたので、体の部分の概念を発達させるのに活用できると思います。また、このスペースに行く前に、必ずキューを使って活動を予測させていました。

このように普段の活動の中に、カリキュラムの要素を入れることで、より活動が充実し、力をつけることができるというように考えられていました。

次に、スケジュールについてです。オブジェクト・キューや iPad の活用により、それぞれのコミュニケーションレベルに応じた時間割確認を行なっていました。学校到着から朝の会が始まる１時間程度の間に、それぞれの児童が担当の教員と一緒に丁寧に時間割の確認を行なっていました。朝の会は大きなボードの前に集まって、朝の会をしていました。

朝の会においては、その他の友だちや教員を意識する機会が多く設けられていました。例えば、教員や子どもの名前の書かれたカードの中から、自分の次に挨拶をする人のカードを指差したり、今日クラスにいる友だちの人数と、家でお休みしている友だちの人数を数字のカードを使用して把握させたりしていました。

次にトーキング・タイムについて紹介します。トーキング・タイムは、子どもたちとやりとりをしながら物語を完成させていくというお話の授業でした。様々な感覚に触れるだけでなく、自分で選択する機会があり、お話に積極的に参加できる内容になっていました。このトーキング・タイムの特徴は、子どもが主体となって話を進めることです。そして、他の子どもが選択したことが、自分の活動に関わってくるので、他人を意識するきっかけになります。感覚を使った活動、身体を動かす活動、コミュニケーション等様々な活動を盛り込むことができ、同じ活動を繰り返すと集中し続けることが難しい子どもも、１つ１つの活動が短いので、頑張ることができるという良さがあると感じました。

その他の取組として、感覚を使った授業、多国籍の国らしく、様々な国の音楽を使用したり、遊びを取り入れたりする活動も行われていました。

教員の専門性についてです。正式な教員は２名だけで、先生のほとんどは非常勤で、学校にいる看護師等だけでなく、様々な専門家が度々訪れていました。それぞれの子どもの定位置に、子どものコミュニケーション方法や好きなこと、嫌いなこと、苦手なことなどがわかりやすく書かれた書類が貼ってあり、いつでも確認できるようになっていました。先生向けのトレーニング等は特に行なっていないそうですが、補聴器をつけた子どもが入ってくれば、みんなで勉強する等その場その場で知識をつけているそうです。職員室はなく、子どもも使用している机にクラスごとに集まり、いつでも情報共有ができるようになっていました。

２．通常の学校における指導

盲ろう児がどのように友だちと関わっているのか、教員はそれをどのように促しているのかについて、通常の学校で学ぶ弱視難聴児を対象に 50 分の授業を４回観察しました。

小学３年生 30 名のクラスの中で、盲ろう児も一緒に学習していました。コミュニケーション方法は音声を使用していました。授業中は盲ろう児の隣にティーチング・アシスタント（TA）が座っていました。

今回の訪問では、算数（グラフの移動）の授業を主に見学しました。算数の授業の大きな流れは、担任の先生がクラス全体に対して 10 分程度の説明を行い、その後自分のペースでプリントを解く、そして、15 分程度経過すると、先生が児童を当てながら解説し、残りの時間は各自プリントの続きを解くという手順でした。授業中は比較的自由で、友だちと相談する児童や、電子黒板の前に移動して教員の説明を再確認している子どももいました。このような授業の流れの中で、盲ろう児も TA と一緒に学習をしていました。TA は、盲ろう児が問題を解き始める前に理解しているか確認し、必要に応じて内容の再確認をしていました。このように、盲ろう児はクラスの中にいて、TA と１対１の指導を行なっている状況でしたが、盲ろう児の隣の席の友だちは、TA と盲ろう児のやりとりを聞いて、話に入ってくる場面もありました。算数の授業４回を通して、22 回の関わりが観察できました。内容は、手助け、質問、活動への参加などでした。

このように、盲ろう児と友だちの関わりはあり、「助けてもらう」という場面ではなく、「一緒に学ぶ」という関わりでした。一方で、関わりは、ほとんどは隣の席の友だちであり、座席配置や友だちの理解がとても大事なことだと思いました。今回は、盲ろう児のコミュニケーション方法が音声だったのですが、コミュニケーション方法によっても関わり方が変わってくると感じました。また、全ての関わりが友だちからだったので、盲ろう児から友だちと関わる機会をつくっていく必要があると思いました。

また、担当の教員による関わり方や盲ろうに対する理解の差があり、教員の専門性・連携の大切さを感じましたが、時々に応じた教員の配置や対応など、柔軟さはとても良いなと感じました。

３．支援施設（TouchBase Pears）での取組

2017 年夏にオープンした盲ろう者支援団体 Sense 提携の施設である TouchBase Pears は、寄付等から成り立っているそうです。対象は子どもから高齢者まで様々で、具体的な指導内容が決まっているわけではなく、サポートして欲しい人が来所すると、その人に合わせて活動が決まっていくといった仕組みだと伺いました。また、学校や大学と提携していました。

設備の様子です。盲ろう者が実際に働いているカフェで、美味しく、朝早くから開いていて、街の中のカフェという役割を果たしていました。活動が見えるような空間でした。その他にも、陶芸室、大小活動スペース、絵本コ

ーナー、ショップなどもあり、２階は貸しスペースで誰でも使えるようになっていました。

イベントの様子です。クリスマスイベントの他に、18 歳頃までの青年の自立を目指す、一緒にハイキングに行くという活動などがありました。ハイキングでは、大学生のボランティアが盲ろうの青年に関わるようになっていて、たとえば、切符を購入するときにどうすればいいのかを相手に伝えるというように、お互いにコミュニケーションをとること、関わることを大切にしていました。

今回の訪問、英国における盲ろう教育の一部を知り得ることができました。他国での取組について知ることで、我が国の盲ろう教育にも生かせる点があると考えています。

ポスターセッション

以下、８件のポスターの発表がありました。全体の場でポスターの概要を説明後、興味関心のあるポスターのところに移動し、活発なやりとりが行われました。発表いただいた方々に感謝申し上げます。

① 幼稚部入学後の盲ろう児に向けた
「周囲の状況を把握しやすい環境づくり」の実践
広島県立広島中央特別支援学校　　平岡千加子　氏
河原　麻子　氏

② 大好きな洗面器手洗いから引き出せたもの
沖縄県立泡瀬特別支援学校　　比嘉　典子　氏

③ 触って感じて楽しむかかわりの工夫

神奈川県立鎌倉養護学校　　森　千佳子　氏
高橋めぐみ　氏

④ Ａ児にとって分かりやすい活動と環境の設定について

福岡県立福岡視覚特別支援学校　　内山　綾乃　氏
末成　智子　氏

⑤ お弁当購入プロジェクト

筑波技術大学大学院（院生）　　森　　敦史　氏

⑥ 先天盲ろう児教育資料データベース

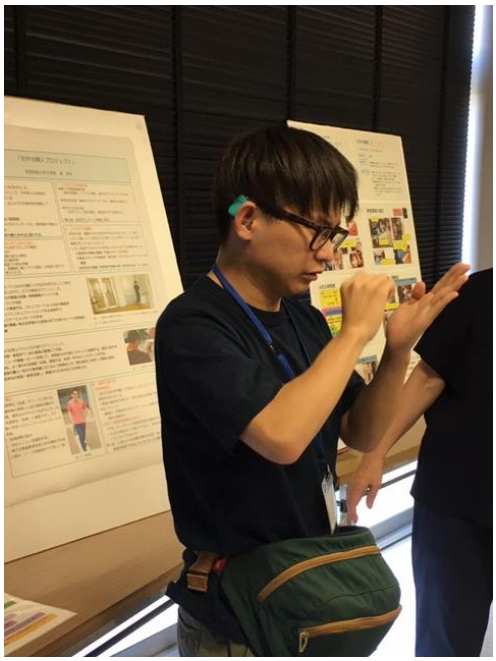
元筑波技術大学　　岡本　　明　氏

⑦ ふうわのココロ

ふうわ・ＣＨＡＲＧＥの会　　田畑真由美　氏

⑧ 兵庫盲ろう児サークル「ふたば」の取り組み

兵庫盲ろう者友の会　　森　　悦子　氏

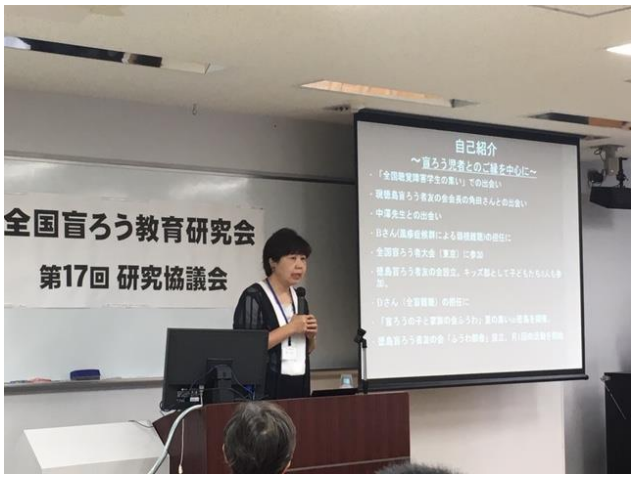


実践報告　　【８月４日】10：00～12：00

「先天性盲ろう児者の生涯の学びを支援する地域活動
～徳島盲ろう者友の会ふうわ部会の取り組み～」

徳島県立徳島聴覚支援学校教諭　　長尾　公美子　氏

はじめに



盲ろう児者とのご縁を中心に、自己紹介をします。聾学校に就職後、手話サークルで現徳島盲ろう者友の会会長さんと出会い、平成７年度に幼稚部３歳児Ｂさん(風疹症候群による弱視難聴)の担任をし、平成９年夏、全国盲ろう者大会（東京）に、Ｂさんファミリーと一緒に参加しました。そして、平成 12 年、徳島盲ろう者友の会が設立されますが、キッズ部として子どもたち３人も参加しました。平成 25 年度には、徳島県立徳島視覚支援学校幼稚部３歳児Ｄさん（全盲難聴）の担任になり、夏に「盲ろうの子と家族の会ふうわ」夏の集い in 徳島を開催しました。そして、平成 29 年度から２年間、鳴門教育大学大学院で「先天性盲ろう児者の生涯の学びを支援する地域活動」をテーマに研究してきました。そして、徳島盲ろう者友の会「ふうわ部会」を設立し、月１回の活動を開始しています。

１．徳島盲ろう者友の会　ふうわ部会について

平成 12 年、徳島盲ろう者友の会が設立されますが、キッズ部は、アイドル的存在で、盲ろう児がありのままの姿で受け入れられていました。そして、元キッズが成人して、15 年間の学校生活を終え、「時間割」「担任や担当の先生」のない生活、学校で身につけたり慣れ親しんだりして自信のある活動が継続されていない生活の中で、大きな生活の変化による気持ちの不安定さ、友の会行事では家族はスタッフとしての役割を担うため、顔を合わせても話をするゆとりがなく、子どもは支援者と過ごすという悩みや課題に直面していました。その中で、自傷や癇癪など行動の問題が現れる、新しい場所や活動に慣れるのに時間がかかる、支援者がどのようにその時間を過ごせばよいのかがわからない、など生活上の問題とともに、友の会に楽しく有意義に参加できているとも言い難い状況にありました。

そこで、学校卒業後も生涯を通して、本人が、わかる、楽しいと感じられる活動を行い、成長できる機会がほしい、本人の微細な発信から気持ちや意

思を読み取ってもらえて、意義のある時間を過ごしてほしい、そのための方策を家族とともに考えてくれる良きパートナーとしての支援者が増えてほしい、仲間と悩みや喜びを共有したい、との家族の思いから、2017 年度（平成 29 年度）に「ふうわ部会」を設立しました。ちょうど、国の動きとしても、特別支援教育の生涯学習化に動きが出てきたところでした。

２．ふうわ部会の活動の基本的な考え方

基本的な考え方として、「共創コミュニケーション」（土谷、2011）の考え方を基本にしています。共創コミュニケーションとは、以下の考え方です。

・欧州の盲ろう教育の専門家グループによって理論構築と実践の推進が行われている先天性盲ろうである子どものコミュニケーションアプローチの考え方
・「子どもに言語を教えるのではなく、子どもの主体性、能動性を重んじ、子どもとのコンタクトと子どものイニシアチブを元に、相互性の高いインタラクションを子どもと共同して作り上げていく。」
・「そのプロセスにおいては子どもとイベントを共有しつつ、喜びという情動の高まりを乗り物にして、子どもの表出を活性化させる。」
・「表出の意味を共有しつつ、対話の流れを創りあげ、自然言語への移行の兆しを捉える」
・成人については「盲ろうのひとがコミュニケーション能力を確立し発達させることはどの年齢でも可能である」「短期間、わずかであってもよい経験をすることで、劇的に他者に対する態度や信頼が変化することを経験している」

そして、アプローチの方略（「共創コミュニケーション」の考え方をもとに）としては以下を基本にしています。

・ビデオによる記録・・・家族や支援者とのビデオ検討会、インリアルアプローチのミクロ分析。
・同じ活動を繰り返し行う・・・毎回同じ場所で「お好み焼きやホットケーキを作って食べる」「好きな活動（水泳、手芸、パソコンなど）をする」の二つを柱とした。
・家族から学ぶ・・・主に母親と対象児者の関わりから、対象児者がわかりやすい方法、伝わりやすいコミュニケーションやサインの読み取り等を支援者が学ぶ。
・良きパートナーとしての支援者の養成・・・支援者が発達の視点を持ち、生涯学習を支える良きパートナーとなることを期待。活動後には「振り返りシート」を記入。

３．活動の概要

【参加者】

対象児者：４名（先天性盲ろう児者）

Ａさん：30 代前半。男性。コミュニケーションの受信は、左耳元近くでのはっきりした声かけ、具体物やモデルを右目で接近して見たり触ったりすることで行う。発信は、表情、行動、発声からの読み取り。

Ｂさん：20 代後半。男性。全盲ろう。コミュニケーションの受信は、触手話（サイン）、具体物やモデルを触ることで行う。発信は、手話（サイン）、相手の両手を取って触手話（サイン）、表情、行動、発声からの読み取り。

Ｃさん：20 代後半。女性。弱視ろう。コミュニケーションの受信は、手話、指文字、筆談、具体物やモデルを見ることで行う。発信は、手話、指文字、筆談と、表情、行動、発声からの読み取り。

Ｄさん：小学部低学年。男性。全盲難聴。コミュニケーションの受信は、触サイン、具体物やモデルを触ることで行う。発信は、いくつかのサインと、表情、行動、発声からの読み取り。

支援者

家族、盲ろう者向け通訳介助者、支援学校教員、学生

これまでに関わった支援者(家族以外)は、27 名。

【活動内容】

・月１回(主に第 3 土曜日)徳島県立障がい者交流プラザにて活動

・11 時前に集合して調理。試食後、13 時～15 時プール、手芸、パソコン、トレーニングジムなど。

・2018 年度はいちご狩り、デイキャンプ、みかん狩りを行いました。他県からも参加いただきました。

・人権関係の助成金を受けて「奇跡のひと～マリートマルグリット～」の映画会開催。

４．４名の活動の様子とその様子からの考察

（映像で４名の活動の様子を紹介しながら）

◆ Ａさん

場所見知りが強く会場に入るのも抵抗があり、調理経験も少なかったＡさん。同じ活動を繰り返し行うことにし、支援者もできるだけ固定して、Ａさんにとってわかりやすく主体的に参加できる方法を継続的に試行錯誤しました。Ａさんが、１ヶ月に１度の活動にもかかわらず記憶して習熟していく経過を追うことにより、活動を繰り返すことの意義を感じました。

① Ⅰ期(１回目～４回目)･･･まだＡさん自身が何をやっているのかがよく理解できず、提示される活動に従いながら、その中で興味を持った

ことをやってみている時期。

② Ⅱ期（５回目～10 回目）･･･Ａさんの中に作業についてのスクリプトが形成されつつあり、少し作業に注目できるようになってきたと考えられる時期。

③ Ⅲ期（11 回目～14 回目）･･･道具を使うことができ始め、活動の一部に対して自発行動が出てきた時期。

◆ Ｂさん

家族や支援者と共に調理する経験は豊富。Ｂさんの発信、１つの動作で発信されても、その時の状況、前後の文脈、それまでの経験等とつながった様々な意味を含んでいることが多いと感じています。ビデオを撮影し、その映像から、実際の場面では見落とされがちなＢさんの発信場面を取り上げ、そこから見えたＢさんの思考過程について考えました。

① Ｂさんの「お菓子」のサインの発信に様々な意図があることが推察された。一連の行動、表情、サインから、Ｂさんの思考の流れや人に伝えようとする行動と支援者がそれを受け止められていない事実が観察された。

② 初めての支援者によって、手首をガシッとつかまれてシソちぎりの作業をしているＢさん。隙を見ては手をふりほどこうとするので、支援者はＢさんの手をさらに強く持ち直して作業を続行。支援されて作業することを嫌がっていると思われたが、Ｂさんが一瞬ですが、支援者の手首を取ろうとしている。そして、支援者にシソのちぎり方を教えようとしている様子も見られた。

◆ Ｃさん

Ｃさんは、自分から周囲の者への質問は多いけれども、相手からの質問は好まず、自分が興味のある内容についての一方的なコミュニケーション態度であるように思えました。支援者と違い、仲間はＣさんに合わせてくれようとはせず、仲間を支援する者も支援対象者の意図を尊重して、Ｃさんに対して様々な要求をすることがあります。14 回目の活動で見られたＣさんがＢさんの様子をよく見たり、相手の要求を推察しようとしたりするなどの場面から、仲間との関わりがもたらす効果を感じました。

また、学校卒業以来７年間やったことのないミシンやパソコン、ホットケーキ作りをとても自信を持って行っている場面から、学校で身に付けたり経験したことが本人の中で大きな財産になっていることがわかりました。

◆ Ｄさん

自発的な触察による探索行動が少なく、自己刺激に入りがちなＤさん。しかし、ふとした瞬間にササッと触ってみることがあり、その後しばらく考える表情で身体を揺らしていたり静止したりすることが多くなってきています。ビデオに記録できたこうした場面を詳細に見ていくことで、Ｄさんが十分満足できる体験とはどういうものなのかを考えていきたいと思います。

私たちは、活動にあたって、通訳介助をできるだけしない、本人が活動することを支援する、ゴールを目指しすぎない、トラブルを回避しすぎない、本人達の思考の流れを邪魔しないでそっと思考を見守る、もっとやりたいと思うことを大事にする、ということを大事にしてきました。そして、活動の中では予想しないことも起きてきます、少しくらいギョッとすることがあってもみんなでアハハと笑おうを合い言葉にしてきました。

２年間の活動の中で、仲間達の様子から、同じ活動を繰り返すことでその活動の意味や順番を理解できるようになるということ、そして、本人の様子や発信を細かく見ることの重要性を実感しました。また、新しいことに好奇心を持っていること、知っていることを拡げようとしていること、学校の中で学んできたことは身についていて、自信を持っているんだなということも感じてきたことです。仲間や支援者、家族を意識している場面も見られていますし、まだまだ伸びていきますが、それぞれ年齢相応の大人だということがＢさんの支援者に対応する態度などからわかりました。この活動の中では、家族から学ぼうということも大切にしてきたことです。そこから支援の輪が拡がっていければいいなと思って活動をしています。

おわりに

学校を卒業すると、生活が大きく変わります。しかしながら、地域での支援者や活動があることで、成長し続けることができます。どの地域でも先天性盲ろう児者の生涯学習の場をつくっていくことが必要なこと、大切なことだと思っています。

盲ろうの人たちは、一人で過ごす時間が多いと思います。その時に、楽しかったこと、おもしろかったこと、そういった記憶をたくさんつくることによって、幸せな気分になれると思います。繰り返し思い出してハッピーになれる思い出を生活の中にちりばめていくこと、積み重ねていくことが豊かな人生につながるのではないかと考えています。

分科会　　**【８月４日】13：00～14：30**

以下のグループに分かれて実施しました。

① 盲ろう幼児児童生徒を初めて担当したあなたへ

参加者：９名（学校教員）

はじめに自己紹介をして、担当児童生徒等の学校での様子、あるいは、今、抱えている課題を出していただきました。担当されているのは、幼稚部から高等部まで幅広い層の生徒でした。その中で共通した話題として、探索、触れる、手を使うということがあがりました。その中で、子どもが確かめたいという思

いを持っているということは、とても主体的で高度なことで、見えない、見えにくい中で手を出す、物に触るということが、とても怖いことであって、そういう主体的な動きを引き出すことが､非常に大切なことであると確認しました。そして、「触る」ということについては、それが、先生にさせられる、触らせられることになっていないか、という視点も大切であり、例えば、アンダーハンド（先生の手の上に子どもの手をのせて、物に触れて、安心した上で、子どもがより主体的に物に触っていくというような触らせ方）の有効性について協議しました。そして、好きなところの前に行くと、例えば水道のところに行くと手が出るといったことは、本人がとても好きなことがある、期待感があって、そういった本人の好きなことと、興味関心を伸ばしていけたらいいねと話し合いました。

また、盲ろう児は極端に情報が少ないので、計画的に、積極的に、本人に分かる方法と内容で情報を伝えていくということが、大事なことだと確認しました。その中で、オブジェクト・キューの話になり、子どもたちに必要な情報を分かる形で伝えていくことが必要であり、オブジェクト・キューの使用がだんだん進んでいくと、キューを板につけ、単なる物と区別することも有効という話になりました。こういったオブジェクト・キューなどの環境を整えていくと、盲ろう児だけでなく、他の生徒にもとても分かりやすい、配慮された環境づくりができるという意見が出ました。

また、不登校気味になっている生徒さんのことについて、理由をみんなで考え、学校が変わったという環境の大きな変化というのは、盲ろう児にとってはとてもストレスなのではないかといった話題になりました。そして、その子のことを一番よく知っているのは保護者であって、保護者と一緒により良い方向を探っていくことを大切にしたい、ということをみんなで確認しました。

（文責：事務局）

② 就学前の生活・支援

参加者：６名（学校教員、支援センター支援員）

はじめに自己紹介と同時に、今、関わっているお子さんのことや悩みをお話いただきました。その中から話題を見つけ、分科会を進めていきました。

１つ目は、子どもの発信についてです。日頃関わっているお母さんに、こんな時、こんな反応があるとか、よく関わっている先生方で反応をみて、どんな物が好きか、どんな時にどんな様子をみせるかとか、皆で共有していくこと、関わる人が、子どもの発信をどう受け取るか、どう広げるか、そしてどんな発信手段が可能なのかを考えていくことを確認しました。そして、日々の関わり

の中で、子どもの様子からコミュニケーションへとつなげていく支援ができるのではないかという話になりました。

２つ目が、好きなことを見付けて関わりを始めるということです。対象となる子が、どんなことが好きかを見付けて、関りのきっかけをつくること、そしてそれを広げること、とても大事なことだという共通理解をしました。ひとりひとりの実態や特性は違うのですが、実態を捉えて、その子に合ったアプローチをして、好きなことを見つけて、それを発展させていくことが大切だと話し合いました。

３つ目が、保護者や家族のサポートについてです。相談などで、お子さんに対して何か支援をするということも大事ですが、相談に来られた保護者のサポートをすることもとても大事なことだと確認しました。子どもとの関わり方などを保護者にわかるように、伝えられるようにということや、保護者同士のコミュニケーションをとる場の設定も話題にのぼりました。

４つ目が、体を動かす活動や遊びについてです。お子さんの好きなこと、今好きだということを発展させる活動について、例えば、プールが好きだ、水遊びが好きだっていう子どもは、プールの中をお水ではなく、シュレッダーの紙片にして、シュレッダープールにしたりする活動や、好きな物を置いて探索活動を促すような設定をするという紹介がありました。

どの話題でもポイントとなったのは、好きなことを見付けて、それをきっかけに活動を広げていくこと、それがコミュニケーションにつながっていくことでした。特に、小さいお子さんの場合は、その子と一緒にいろいろな活動をやってみて、何か好きなことを見付けたら、それをきっかけに関わりを広げていけるといいのではと話し合いました。

（文責：事務局）

③ 卒業後の生活を豊かに

参加者：14 名（保護者、学校教員、支援機関職員等）

３つの柱で話し合いをしました。１つ目が生活を豊かにするには、２つ目が就労について、３つ目が親亡き後をどうするか、ということでした。

１つ目の生活を豊かにするためにはということについては、いろいろな楽しみ方をしているというお話がたくさん出てきました。例えば、みんな大好きなスイミング、乗馬、ヨット、スキー、卓球、フラワーアレンジメント、お料理、サウンドテーブルテニス、手芸、音楽倶楽部など、これらを継続してやっていくことでそれをとても楽しみ、楽しんだ後ニコニコ笑っているとか、楽しかったなと思い出してちょっとご機嫌で過ごすといったことがあります。例えば今

度の日曜日にお料理をするから、毎日を楽しみに過ごしていこうというような見通しに繋がったらいいなぁ、という話もでてきました。

大好きな人が多い水についてですが、水も温水プールだけじゃなくて、海、海はとても、いろいろな幅広い楽しみ方ができるという、楽しみ方を紹介してくださいました。サラサラの砂でまず遊ぶ、ちょっと湿った砂で遊ぶ、波打ち際で遊ぶ、ちょっと足がつくくらいのところで遊ぶ、足のつかないところで遊ぶ、というようにいろんなバリエーションで遊ぶことができます。こういった余暇、楽しみというのを豊かにしていくためには、どうしても支援者の問題が切り離せません。支援者をどのように増やしていけばいいのだろう、という話も出てきました。手話サークルなど、聞こえない人たちに興味のある人を盲ろうの活動に誘ってみればいいのではといった話題もでてきました。

次に就労についてですが、在宅勤務など、盲ろうの人たちの就労については通勤の問題がどうしても出てくるので、在宅勤務という話も出てきましたが、一方で、盲ろうの人たちにとっては、１日１回だけでも、他の人と一緒にご飯を食べたいとか、他の人と触れ合ってお話をしたいとか、外に出たいとか、というような願いをもっている方がいるので、そういう方たちの思いが叶うようにするにはどうしたらいいだろう、という話題になりました。

最後に、親亡き後どうするかという話、切実な問題だと思います。施設をつくるというような動きをしていくことも大事だけれども、今の時代、大きな施設をつくって、というようなことは公的にはなかなか認可されません。また、重度の人たちが生活する、盲ろうの人たちが生活するとなると、消防法の問題などもでてくること、グループホームをつくってそこで生活していくということが一番具体的にイメージできる姿という話も出てきました。また、他人の中で逞しく生きていく力を身に付けるということも、将来に向けてはとても大事なことではないか、といった話題もでました。

（文責：事務局）

④ コミュニケーションについて

参加者：12 名（学校教員、施設職員、保護者）

最初に、分科会に対して期待することを含めて自己紹介をしていただきました。自己紹介の中で、ある学校の先生から、実は転校してきたばかりの盲ろう、知的、肢体を併せ有しているお子さんが、なかなか新しい環境になじめず、落ち着かず、他害や自傷もある、関わり方に大変苦心をしているという話が吐露されまして、緊急度が高いのではないかということで、このケースに対しての情報交換から始めました。

そして、盲ろうのお子さんの保護者の方から、具体的なコミュニケーションの課題として、「まだ」というのをどのように教えればいいのか、どのくらい待てばいいのか、どんな風に伝えればいいのかを悩んでいるといったことも出されました。また、参加者から、「始まり」と「終わり」の教え方、子どもから離れる時の伝え方、好きなことを選ぶといった時にはどういう風に伝えたらいいのか、といったように日頃、悩んでいることが出されました。

これらについて、「待つ」ということを伝える方法、「待つ」だけではなく、どのくらい待つのかの伝え方について協議をしました。カレンダーボックスの使い方、例えば、家に帰った後も、カレンダーボックスを使って、スケジュールを提示するというように、伝え方を工夫していくことが出されました。また、待たせている間に、子どもが好きな活動をする、ということも、一つの方法だという話もありました。

大切なことは、学校内で、また学校と学校外（家庭等）で、情報を共有すること、同じサインで関わるということが大事だという確認をしました。

（文責：雷坂浩之、森敦史）

⑤ 補聴器・人工内耳について

参加者：11 名（保護者、学校教員、大学教員、支援機関職員等）

本分科会は、国立病院機構東京医療センター　耳鼻咽喉科　松永達雄先生にお越しいただき、参加者が補聴器や人工内耳について疑問を解決して理解を深める、という企画でした。盲ろう児の保護者を中心に、盲学校・大学関係者なども含め 11 名が参加しました。

まず、松永先生から、ご自身の専門分野やこれまでの取組の紹介がありました。松永先生は、病院で診療をしている中で、「たまに」出会う盲ろう者に、説明がうまく伝えきれない、限られた時間の中で伝えたつもりになっても伝わっていないことがある、といったご自身の経験が、盲ろうに関心をもつきっかけとなったそうです。盲ろうの方が来院された時のガイドラインやそれを構築するためのデータがないことを知った先生は、耳鼻咽喉科医として遺伝性難聴や小児難聴を専門とする傍ら、2017 年度から厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等政策研究事業「先天性および若年性の視覚聴覚二重障害に対する一体的診療体制に関する研究」に取り組まれることになったとのことでした。

上記の研究では、盲ろう者のための標準的な診断・治療法をまとめることを目標としています。これまでに、盲ろう者への医療に関するＷＥＢサイトを立ち上げ、すでに第１章、第２章は公開されています。また、研究事業の一環として、市民公開講座の開催にも取り組まれています。

参考：「視覚聴覚二重障害の医療」
URL はこちら→　http://dbmedj.org/index.html
松永先生からの自己紹介のあとは、参加者一人ひとりが自己紹介を行い、補聴器や人工内耳についての経験や疑問、困っていることを話し合いました。
保護者の方々から出された話題の中には、次のようなものがありました。
・「うちの子は補聴器をつけたがらないときがあるけれど、どうして？」
・「補聴器をつけたがらないときはどうすればいいでしょう」
・「人工内耳をすすめられたことがないのだけれど、なぜ？」
・「人工内耳をすすめられていくつもの病院に相談したけれど、病院と教育機関で言われることが違っていて、とても迷いました」
盲学校・大学関係者からは、次のような話題が出されました。
・「人工内耳を装用している人とのコミュニケーションのポイントは？」
・「人工内耳のしくみを詳しく知りたい」
・「地方と都会とで、病院の人工内耳の技術に差があるの？」
こうした数々の疑問について、松永先生から補聴器と人工内耳の適応、人工内耳の仕組みや音質についてなど、わかりやすい言葉で惜しみなく教えていただき、参加者全員が充実した時間を過ごしました。
（文責：柴崎美穂、左振恵子）

盲ろう児者活動プログラム報告

今年の盲ろう児者の参加数は６名、兄弟姉妹１名、ご協力いただいたスタッフ・ボランティアは、21 名でした。海辺にある久里浜らしいキリッとした暑さと熱風の中の活動でした。
今年も筑波大学附属久里浜特別支援学校の幼稚部教室を拠点にして、プールや遊具・玩具を沢山、使わせていただきました。また、国立特別支援教育研究所のスヌーズレンやトランポリンルームもお借りして活動することができました。これら、多大なご支援に心より感謝申し上げます。
海の見える屋外プールでは､数年ぶりに泳いだ 30 歳の Y さんを筆頭に思い切り水遊びや水泳を楽しみました。特大フロートや浮輪に乗ったり、ホースの水撒きや底に撒いた貝殻玩具を拾ったり、浅場で身体をのばしてリラックスしたりしました。また、昨年はプールにたどり着けなかった I さんをボランティアさんが座椅子がわりになって台車に乗って連れていってくれました。お陰で昨年のリベンジを果たして水遊びをすることができました。
教室の入口に吊り下げた新聞紙の暖簾をくぐると、幼稚部教室です。柵で仕

切られたエリアには吊り下げ遊具、工事用の青色シートの上には大きな風呂敷、ドアを開けた人工芝の庭には水風船を沢山浮かべたビニールプールがあります。壁際に配置された飲み物コーナーや触察コーナー、部屋の真ん中のトランポリンなどは、盲ろう児者の行動の手がかりとなる環境設定です。その中で自発的に行動したり、ボランティアさんと一緒に活動しました。

盲ろう児者とボランティアさんの双方にとって、楽しく充実した時間になりました。

（文責：星野勉・亀井笑）

音声と手話で活動の報告をしてくれました

盲ろう児者活動プログラムでお借りした、筑波大学附属久里浜特別支援学校に遊びに来た、大きなリス

●第 17 回定期総会報告　【8月4日　9：00～9：30】

会長挨拶後、出席者数・委任状数を報告・確認し、議事案件の審議に入りました。

・議案１　2018 年度事業報告

以下の通り、提案がなされました。

１．運営委員会を３回開催し、運営基盤の整備を図った。

２．全国盲ろう教育研究会会報を発行し、情報提供を行った。

３．研究会のリーフレットを作成・配布し、盲ろう教育に関する情報発信に努めた。

４．全国盲ろう教育研究会第 16 回研究協議会を開催し、盲ろう児・者に関わる教育研究の向上及び情報交換を図るとともに、第 17 回研究協議会の準備を進めた。

５．「盲ろう教育研究紀要第 13 号」の発行に向け、内容の検討を行った。

６．Web サイトの内容の充実を図ったが、十分な情報提供には至らなかった。

７．東京都盲ろう者支援センターと共催で、盲ろう教育に携わる教員等を対象とした研修会を開催し、教育の充実を図った。

８．盲ろう児と家族の会ふうわ、CHARGE の会、東京都盲ろう者支援センターと共催で、「家族の交流の広場」を開催し、意見・情報交換の場を設けた。

〇原案通り、了承されました。

・議案２　2018 年度会計報告

以下の通り、提案がなされました。

【2018 年度全国盲ろう教育研究会会計報告】

【収入の部】　＊単位は円

項目	2018年度予算	2018年度決算	備考
前年度繰越	257,175	257,175	
年会費	260,000	238,000	2019 年３月 31 日現在 会員数 124 名 納入者 83 名（複数年度分の納入を含む）
その他	—	3,504	ご寄付、預金利息
合計	517,175	498,679	

【支出の部】　＊単位は円

項目	2018度予算	2018年度決算	備考
第 16 回定期総会報告書発送費	50,000	37,242	会報第 17 号に、第 16 回定期総会報告書の内容をもりこんだ。
会報第 17 号発送費	50,000		
第 16 回研究協議会案内発送費	50,000	52,170	2017 年度送付予定だった、第 15 回定期総会報告書、会報第 16 号を同封した（2018 年５月）。
リーフレット発行費	100,000	0	業者委託せず研究会で印刷した。
リーフレット発送費	50,000	0	会報第 17 号送付時にリーフレットを同封した。
Web サイト維持費	35,000	22,248	
事務費	80,000	54,066	
会議費	60,000	18,550	第104回～第106回運営委員会開催の交通費実費。
予備費	42,175	0	
合計	517,175	184,276	

残金　314,403 円【収入 498,679 円－支出 184,276 円】は次年度に繰り越します。

〇原案通り、了承されました。

【第 16 回全国盲ろう教育研究会研究協議会会計報告】

【収入の部】　　＊単位は円

項目	金額	備考
参加費（会員）	114,000	会員　3,000 円×38 名
参加費（非会員）	120,000	非会員　4,000円×30名
繰越金	242,706	
合計	476,706	

【支出の部】　　*単位は円

項目	金額	備考
事務費	85,204	
情報保障費	121,292	全体手話通訳費用、ボランティア交通費等含む
講師謝金・交通費	10,000	
雑費	13,288	
合計	229,784	

残金 246,922 円【収入 476,706 円－支出 229,784 円】は、今後の研究協議会での運営費として使用します。

〇原案通り、了承されました。

・議案３　2019 年度事業計画

以下の通り、提案がなされました。

１．定期的に運営委員会を開催し、運営基盤の充実を図る。

２．全国盲ろう教育研究会会報を発行し、情報提供を行うと共に、会員相互の情報交換に役立てる。

３．研究会のリーフレットを広く配布し、盲ろう教育及び研究会の情報発信に努める。

４．全国盲ろう教育研究会第 17 回研究協議会を開催し、盲ろう児・者に関わる教育研究の向上を図るとともに、第 18 回研究協議会の準備を進める。

５．「盲ろう教育研究紀要第 13 号」を発行する。

６．Web サイトの内容の充実と活用を図り、情報提供および情報交換を図る。

７．東京都盲ろう者支援センターと共催で、盲ろう教育に携わる教員等を対象とした研修会を開催し、教育の充実を図る。

８．関係する機関と連携しながら、盲ろう児・者の教育と福祉の向上に寄与する。

〇原案通り、了承されました。

・議案４　2019 年度予算

以下の通り、提案がなされました。

【2019 年度全国盲ろう教育研究会予算案】

【収入の部】　＊単位は円

項目	金額	前年度との差
前年度繰越	314,403	△ 57,228
年会費（2,000円×122名）	244,000	▲ 16,000
合計	558,403	△ 41,228

【支出の部】　＊単位は円

項目	金額	前年度との差
第17回定期総会報告書発送費	50,000	△ 0
会報第18号発送費	50,000	△ 0
第17回研究協議会案内発送費	50,000	△ 0
研究紀要第13号発行費	200,000	△ 200,000
研究紀要第13号発送費	50,000	△ 50,000
Webサイト維持費	35,000	△ 0
事務費	60,000	▲ 20,000
会議費	50,000	▲ 10,000
予備費	13,403	▲ 28,772
合計	558,403	△ 191,228

〇原案通り、了承されました。

・議案５　役員改選について

会規約第９条に従い、以下の通り、新役員が選出されました。

今まで、研究会運営に御尽力いただいた皆様、ありがとうございました。新役員の皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

会長	中澤　惠江
副会長	上田　淳一
	星野　勉
	雷坂　浩之
会計	柴崎　美穂
会計監査	森　　貞子
	左振　恵子
事務局長	星　　祐子

◆運営委員会・事務局より◆

●第 17 回定期総会・研究協議会で海外情報報告、実践報告、ポスター発表をしてくださった方々、そしてご参加いただいた皆様、お忙しい中、ありがとうございました。今回も、ボランティアの方々をはじめとして、多くの方々に多大なるご協力をいただきましたこと、心よりお礼申し上げます。皆様からいただいたアンケートでは、今後の運営に対しても貴重なご意見をいただくことができました。これからもより充実した研究協議会となるよう努めてまいりますので、今後ともご協力のほど、宜しくお願いいたします。

●東京医療センターの松永先生が中心となって取り組んでいらっしゃる盲ろう者への医療に関するＷＥＢサイトが立ち上がっています。
参考：「視覚聴覚二重障害の医療」
URL ： http://dbmedj.org/index.html

●全国盲ろう教育研究会ＨＰで、盲ろうの子どもたちの教育に役立てていただけるよう「教材・指導法データベース」の掲載を準備しています。どうぞご期待ください。

●会費納入のお知らせ
・年会費（2,000 円／年）の納入状況を、宛名ラベルの下欄に記載しています。未納のある方は、納入をお願いいたします。ラベル印刷後に納入された場合など、行き違いがありましたら、どうぞご容赦下さい。
（例）「2019 未」： 2019 年度分未納を表しています。

・ご本人名義で納入してください。「〇〇年度年会費」と記入してください。ただし、過去に未納の年度がある場合は、過去の年度分として領収させていただく場合がありますので、ご了承ください。

◇振込・振替先（みずほ銀行、または　ゆうちょ銀行をご利用下さい）
　みずほ銀行　本郷支店
　口座番号　　普通預金　８０６２８０６
　口座名義　　全国盲ろう教育研究会会計　柴崎　美穂

　ゆうちょ銀行
　口座番号　　００１００－６－４８４１３６
　加入者名　　全国盲ろう教育研究会

●連絡先変更等のある方は、お手数でも事務局までご連絡ください。

●2020 年度の夏の盲ろう関係の大会・つどい等のご案内

・2020 ふうわ夏のつどい in 広島

７月 18 日（土）～　19 日（日）

広島県にて開催予定

・第 29 回全国盲ろう者大会

８月 28 日（金）～　30 日（日）

鳥取県にて開催予定

☆★お知らせ★☆

◆ 全国盲ろう教育研究会　第 18 回定期総会・研究協議会

期日：2020 年８月１日（土）・２日（日）

場所：国立特別支援教育総合研究所（神奈川県横須賀市野比 5－1－1）

内容：講演、実践報告、ポスター発表、分科会

＊詳細は、同封の研究協議会案内（第１報）をご覧ください。
研究協議会では、皆様が持ち寄ってくださった全国各地の実践報告・交流を大切にしています。是非ともポスター発表をご検討ください。